

矢野さんの思い出

高教一



嗚々永年敬愛の的であった矢野松三郎さんがお手厚き御介抱も空しく去る二月二十日遂に鬼籍に入られました事は今もって私の許め切れざる歎きで耐えられません。

職場を共にしてから五十年余りの御交際、その回想は走馬燈の如く尽きませんが偲び草ともなれば良いと思ひ若かりし日の矢野さんの片鱗をお伝えすることも何かの御縁でしょう。

大正六年の春、鈴木化学試験所が神戸製鋼所構内から兵庫製油所内に新築が落成、移転が終り、私は高尾君と共に彦島精練所に赴任し、小森江の済美寮に起居することになった。而して神戸工業校出身の堂の下君とその大広間に同居し何かとお世話を受けた。入浴後は毎夜のように寮員数名が遊びに詰

めかけた。昨年故人となられた滝君や増田君からは、門司市の裏の風頭山の話や鈴木君の北九州の工業発展の模様、殊に彦島精練所建設当時の波乱万丈の苦心談等詳細話された。

翌年四月頃、下村尚美所長は網干のセルロイド工場に転任せられて、戸坂隆吉氏が代りに赴任されて来た。ここで始めて矢野松三郎さんと奇しくも温顔に接する機会を得た。元旦の休みは新入寮者のための懇親会が開催されることとなり、私と矢野さんがその世話役を仰せつかった。当時のこの寮は鈴木君の事業所の独身が多数占めていた。当時神鋼門司伸銅工場建設中であり仲々活気が漂っていた。

赴任してから日の浅い私共は寮員とは馴染みが薄かったにもかかわらず、親睦会を初め庭球、柔道、剣道、講演会等開催される日も多く仲々盛んで愉しかった。話を事業所の方に切りかえすが、電気分銅工場の準備が終った頃、後藤幹夫氏は帝国人絹に、山本氏は豊年製油に転任され又最も親しかった矢野さんも本店冶金部に転任されて聊か寂寞を感じた。それから私は電気分銅の技術部を担当することになったが、ここで私は青銭処理工業の一大事にぶつ

かりとんだ苦勞の種をつくった。青銭処理工業に最も必要とする原料の厘銭の輸入が予定通り入荷出来ず、一方日比精練所の粗銅も材料も欠乏するばかりになり心細く前途の見透も暗くなつて来た。又それに加え青銭の副産物なる亜鉛の回収の電気亜鉛企業は水素瓦斯の発生甚だしく今で云う公害問題である。従業員のための苦痛が甚だしく全く手のつけられぬことになった。

之は技術的の見当の狂いが斯う云う結果を来したと思われる。肝腎の発案者の吉原重威君はどうと顔をみせず仕舞い。大阪亜鉛の技術を持込んだ足立君と鹿児島出身の堀口君とは常に馬が合わず足立君は遂に辞職した、従って此等の不安定な企業をひと先ず整理することになり一〇〇名以上の従業員が離散の憂目を見たが神鋼門司伸銅所へ大部分採用された事は全く不幸中の幸であった。この時、永年職場を共にした方々と別れるのは誠に感慨無量の思いであった。

矢野さんの代りに大岡君が来られたが工場事務に不馴れの為何の時の間にか事務所から姿を消した。その後菊池君が来て真剣に原価計算を手がけたが原料の賜極は

電解槽に投げ入れて数ヶ月経たなければ結果が判明せぬことから損失が表れず当惑され不安に思ったのか転出を希望してこの人も又去った。

その後事務担当者が空席となつたので矢野さんに再び彦島に来て戴いて意を強くした。忽ち工場の霧閉気が一度に明るくなったようだった。矢野さんは谷山君と二階の北側の関門海峡に面した部屋に私はその向いの静かな部屋で山林を前にして仕事に励んだ。神戸商業出身の宮崎君とは一緒に寝起きをしていた関係上、毎夜の様に仕事の話が多く、又矢野さんは人一倍研究心が強く結論実行形のきびきびした御性格で私とは常に気が合った。或る日の夕方社から帰る途中、浦江の方に行つて見ようと云われ大里から二十町からの山越しに雑談を続けながら同伴したものの咽喉は乾くやら空腹を覚えるやら田舎道に店屋はなしお互に疲れ切つたので又の目を約して帰途に就いたが偶々峠に山小屋があり、そつと覗くと豆腐屋らしく仕事をしているの飛び込み豆腐を分けて貰い一人で三丁つべろつと平げた。この味は又格別で大いに元気が出たが時刻を聞いて十二時であることに気がつき驚いて門

限も越えている事でもあり気が気でなく坂道を急いで松林の月照りを便りに無事寮に帰ることが出来たのは二時を廻つていた。このよう矢野さんとの思い出話は筆紙に尽きませんが、この辺で今回は擱筆させて貰います。

終りに臨み謹んで矢野さんの御冥福を祈つて止みます。

追記

前号に矢野松三郎さん自ら「冥土から帰つて来た八十翁」と題して長文の述懐談をお寄せになり、九死に一生を得られた喜びをお伝えられた事は耳新しい事でありました。然るにその後の御容態刻々凶悪に向われ御夫人初め皆々さんの御看護も空しく遂に鬼籍に入られました事は今だに信ずることの出来ぬ痛恨事でありました。茲に前号の御絶筆を再読して謹んで御冥福を祈るばかりです。(編)

弔辞

日工株式会社 八巻信郎

謹んで弔の詞を申し上げます。故矢野会長には、昨年八月突然腹痛に見舞われ、明石市民病院に入院されましたが、日頃とてもご壮健のおからだだから、すぐ全快されることだろうと思つて居りましたが、一時は危険状態になり、

意識を失われる程にまでなられたのでありますが、適切な手術の結果、一命をとりとめられ、十一月にご退院になり、その後お元氣な姿を拜見しておったのであります。

本年一月、再び病状が悪化し、ご夫人、ご家族、明石市民病院の皆様、当社各員の懸命な看護にも不拘、二月二十日、午前七時五十二分、遂に帰らぬ人になってしまわれしました。誠に残念でございます。痛歎の極みでございます。

私共、天をうらみ、地に歎くのもいで胸一杯でございますが、平素の会長の御意志に従い、肅然として社業に精勵いたして居ります。

会長は、愛媛県大州のお生まれ、十七才で鈴木商店にご入社、少壮氣鋭の努力家の気性と手腕を買われ、弱冠二十七才で創業当時の、当社の代表取締役就任せられ、以来五十三年の永きに亘り、常に陣頭に立たれて、社運の興隆にいそしまれました。

その間、我国の政治経済は洵に變遷極りなく、寄せては返す荒波に克く日工丸の操縦に御尽瘁され、そのご労苦、ご努力は筆舌に尽し難く、矢野会長の御生涯こそ、そのまま日工株式会社の歴史

であつたと申せましよう。創業時には、デッチメンによるショベルの手造り生産から始められ、金物屋店頭に於ける釘ダルの腰をおろしての商談等々に幾多の困難を克服せられ、今日の日工の繁榮の基礎を築かれたのであります。

社業が漸く順調に推移するや、海外発展を目指し撫順に満州機工株式会社を設立して、満州進出を成しとげられ、大東亞戦争が始まるや、マレー、クアラルンプールに日本工具馬来工場を創設し、率先して単身乗り込み、短時日の内に創業を開始し、現地で要望された土工具の生産を続行中終戦となり、一時彼地に抑留の後翌二十一年、二月に空爆による荒廢下の明石に帰られました。

当時工場は殆んど潰滅し従業員も大部分四散し、茫然自失、何事も手つかずの状態でしたが、帰還の翌日から一日も早い復興あるのみと全員を督励し、第一、第二、第三工場を次々に復旧し、その秋、十一月には復興祭を執り行い、戦後荒廢した国土復興に最も必要とされた土工具の生産をいち早く開始されました。その様相は、明石市民のみならず、多くの人々の驚きであり、賞賛的でありました。戦後の混乱期もやがて

過ぎ、本格的な国土建設の時代になりますと、業容も在来品に加え、トロ車輪、ナベトロの土砂運搬機から逐次、動力ウインチ、コンクリートミキサーの生産販売を開始されました。

時あたかも静岡県天竜川上流の佐久間ダム建設工事現場を見学せられ、一段と建設機械の将来性を見透され、パッチャープラント、アスファルトプラント、ベルトコンベア、建築用仮設機械等の製作販売に社業を拡大され、現在年商一六〇億に近い日工を育て上げられました。

その間、会長の企業経営の理念は矢野精神とも申し上ぐべきもので、当時社の重童共は「エンヤラの精神」と申し上げて居りましたが、常に大地に足を踏え、動ずることなく着実に努力して歩を進めると共に、一旦機の熟するや、猛然と進まれる精神行動を以つて、我等を慈愛こもる、態度を以つて育成されました。先に天満副社長、野村専務、吉本副社長が相次いで亡くなられた時に、その弔辞に「正に私は、両腕片足をもぎ取られた一本足のカカシである。しかし私は悲観しない。諸君が育て上げてくれた新進氣鋭の士が沢山居る、是等の人達が、君の死に

杉山金太郎氏弔辞

豊年製油株式会社
取締役社長 吉井 泰次



日工マンの心には、会長の雲上からのお声がよく聞えるのです。願わくば、永遠に我社を見守られると共に、ご生前にもました激励のお言葉を頂戴いたすことを祈りまして弔の詞といたします。
昭和四十八年三月一日

今は亡き杉山金太郎翁のご霊前に謹んで告別の辞を捧げます。昨年九月ご入院以来、私達一同は、あなたのご快癒を心から祈念致し、是非とも百歳の長寿を完うして頂きたいものと念願致しておりました。

天寿とは申せ、本日茲に永遠のお別れをせねばならないことは、誠に遺憾の極みであり、うたた寂寞の思いに堪えません。

顧みれば、あなたは明治八年九月和歌山県永穂村に「々」の声をあげられ大阪市立大学商学部の前身である市立大阪商業学校を卒業後、実業界に身を投ぜられ、大正十三年五月をわけて当時創業期にあった豊年製油の社長に就任されました。思えば、それは五十年前あなたが五十才の時でありました。

爾来半世紀に及ぶあなたの生涯は、社業発展への努力の連続であり、また日本に於る食用油脂産業発展の生ける歴史そのものでありました。あなたの半世は、名実ともに我国大豆製油産業の先駆者として大豆油の食用化と大豆蛋白の各種用途の開拓に捧げられたのであります。

その功績に対しまして昭和十七年六月紺綬褒章を昭和三十年十一